

アーカイブ 通信 No. 3

No.3

2015.2.20

◆編集・発行：

ネットワーク・市民アーカイブ

◆tel/fax: 042-540-1663 (事務局)

tel/fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)

E-mail: simin-siry@nifty.com

http://homepage3.nifty.com/simin-siry/

◆正会員 1 口 6000 円、賛助会員 1 口 3000 円

ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226

口座名：市民アーカイブ

集会報告

市民発の情報が 社会を変える

市民活動のアーカイブの可能性

2015.1.11 於：一橋大学

◆第1部 パネラー報告

活動と資料館の関係

山家利子(アンティ多摩)

この運動が起こる基になった都立多摩社会教育会

当会運営委員(当時) 8人が執筆しました。今回のシンポジウムでは、その内容をもとに報告し、研究者からコメントをしてもらいながら、会場全体で市民の資料の価値、収集の方法、利用の工夫などについて話し合いました。当日は遠方を含めて66人の参加があり、市民による資料の収集・発信・活用への関心の高さが感じられました。

館の「市民活動サービスコーナー」(以下、コーナー)は1972年に開設され、30年間東京多摩地域を中心とした市民団体にサービスを行いました。02年に事業廃止となり終了しました。原稿にはそこでの資料収集と公開についてかなり具体的に書きました。

コーナーが作られたのは全国的に高度成長政策の矛盾が公害などの形で表れ、それに対する市民の反対運動が全国的に大きく盛り上がった時期です。当時の美濃部知事が教育庁に対して主権者意識涵養

開館1周年集会を開催します

5月24日(日)午後

「市民アーカイブの活用を考える」(仮)

講師：高木恒一さん(立教大学共生社会研究センター長)

昨年4月6日に開館記念集会を開催してから1年が経ちました。

小さな資料室で、しかも月6〜7回の少ない開館日ですが、定期的に開館することとは、きちんと資料と向き合う時間が出来たことでもあり、整理作業に追われつつも資料活用へのアイデアも湧いてきています。

2015年5月24日、1

周年を記念して右表題の通り、たましんりスルホール(立川市民会館・立川駅徒歩12分)で講演会を開催します。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

なお、講演会の前には総会を開催します。ぜひ会員として当アーカイブと一緒に支えてください。

「緑蔭トーク」

第1期スタート

玉川上水駅からほど近い雑木林の一画に、市民アーカイブ多摩があります。クヌギやコナラ、山桜などの樹々が織りなす四季折々の風景には、しばしば我を忘れて見いっ

てしまします。その雑木林が新緑に彩られる4月から、あらたな企画「緑蔭トーク」を始めます。わたしたち市民アーカイブ関係者の、あるいはお招きしたゲストによる、それぞれの話題に沿ったお話が、くつろいだ雰囲気の中でお繰りひろげられます。話題は広く、しかもどこかで私たちの活動にも資する内容で、構成していきます。どうぞ、お気軽にご参加ください。時間はいずれも午後4時15分から。

◆第1回 4月25日(土)

「アーカイブとは何か？」

「アーキビストからの提案」

中村修(運営委員・藤沢市文書館史料専門員)

◆第2回 6月27日(土)

「玉川上水の歴史を知る」

「文明開化と玉川上水」

杉山弘(運営委員・町田市立自由民権資料館学芸担当)

◆第3回 8月22日(土)

「ウルグアイのメモリアムミュージアム」

荒井容子(運営委員・法政大学社会学部教授)

◆第4回 10月(予定)

「3・11震災からの資料レスキューについて(仮)」

(講師打診中)

のための施策を指示して設置されました。具体的な事業としては、市民活動のための資料収集・提供、交流の場と機会の提供、相談事業などでした。

資料事業も「市民活動のための資料室」であり、市民活動が生み出す資料を集めるという意識はやや後から生まれてきたように思います。コーナーの資料収集について、雑誌には「団体が連れてくる資料、資料が招き寄せる団体」という表現で、市民の活動自体と資料の関係を書きました。

市民アーカイブ多摩も、市民活動自体との関係について考えを深め、実行していくことが、資料館の資料を充実させ発展に還つてくると思います。

アーカイブを作る運動

江頭晃子(アンティ多摩)

山家さんが話された「市民活動サービスコーナー」が廃止されてから、「市民アーカイブ多摩」をオープンするまでのことを執筆しました。

コーナーが廃止され資料が廃棄の危機に陥った時、東京都に資料散逸をさせないことや、立川市に対しては資料をもらいうけてほしいことなどの働きかけから始まりまし

(その結果立川市に保管)。06年に「市民活動資料・情報センタールをつくる会」が発足。当初は、行政や企業等に資料室をつくってもらうための活動に終始していましたが、そのうち、「自分たちでつくる」という運動に変わっていきました。募金活動を始め、NPO法人グリーンサンクチュアリ悠敷地内の平屋を拝借できることになり、改修工事を行うなど、最初は「つくることを考える」団体だったのが、「自分たちで動いて作る」団体へと脱皮していったのが開館に



つながったと思います。運営を更に軌道にのせたら、アーカイブを団体活動の拠点の一つにしていきたいと思っています。今後の課題としては、次の資料保管庫、資料収集拠点とのネットワーク、資料収集提供のマニュアル化、次の世代へのバトンタッチなどを考えなければと思っています。

人びとの息遣いを訊く

杉山弘(町田市立自由民権資料館)

私の課題意識は、市民アーカイブ多摩をいかに活用してもらえるか、です。

拙文では、自治体史(『小平市史近現代編』)における現代史叙述に、市民活動のアーカイブ(『市民活動資料』)が活用された事例を紹介しました。『小平市史』は、市民のくらしを中心にすると、という編集方針を掲げていますが、「福祉」や「連帯」をキーワードにした叙述がなされています。その際に、市民活動のアーカイブが決定的に重要だった、と編者は述べています。

これは、市民活動のアーカイブが歴史的資料として活用された事例ですが、市民活動のアーカイブには他にも、そ

れぞれの市民活動にとつてのアクティブな意味合いが元々あり、また収集され、ファイルされ、棚に配架されたそれにも、視点や課題の多様性に気づかされる、言わば「知恵の宝庫」としての意義があります。いずれもが「人びとの息遣いを訊く」ことに繋がると思います。

このように市民活動のアーカイブの意義(有用性)をひとまず整理した上で、それぞれの活用を促してゆくための、アプローチや手がかりを整備していきたいと思っています。

多様な価値観とともに

中村 修(藤沢市文書館)

「市民活動資料」が保存の対象となるという認識が生まれたのは、そう古くはありません。アーカイブズ学の中でも、それに類する話題が登場してくるのは、70年代後期の『日本古文書学講座』シリーズ(特に近代編Ⅱ)からです。先述の市民活動サービスコーナー、民間の模索舎、住民図書館などの活動のほうが先駆的でした。

このような傾向が変わり始めるのは90年代に入ってからです。安藤正人が「草の根文書

館」の構想を語りだしたことが大きいのです。また、90年代は60年代あるいはそれ以前から続いてきた社会問題の「解決」が叫ばれ、その産物として資料保存施設が設立されるようになった時代でもあります。

しかし、市民活動資料の保存を取巻く環境は非常に厳しく、多くの問題を抱えているところも多いです。公的なアーカイブズさえ予算不足で廃止になることもあります。

しかし、「多様な価値観を包含する器」として存在してこそ、アーカイブズは輝くことができる(大濱徹也)存在であり、そのためにも市民活動資料の把握が必要にして不可欠なのです。

記録し、つなげていく

安東つとむ(ジャーナリスト)

フリージャーナリストとしていくつもの運動にともに担いながら関わってきました。小樽運河保存運動、セクハラ事件、チベット支援運動、阪神大震災ボランティア、薬害エイズ支援運動……。それらの運動の特徴は、ミニコミか、ともに担ったひとたちの記憶に残っていないものがありま

す。それらをつなぎ合わせ、担い手のインタビュアーなどにより再構成して、一つの運動の歴史を書き残す作業をすること。も私たちの求められているのでしょうか。

どの運動にも、その人なくして広がりがあり得なかったという人が存在します。薬害エイズ裁判を大学生・高校生にまで広げ、霞ヶ関をセーラー服で埋めて、厚生官僚たちに脱帽させた運動を広げた2人の女子大生。小樽運河保存運動を港や運河で学園祭のようなお祭りを開いて子どもを含めた地域の人をまきこんであと一歩で全面勝利まで広げた3人のリーダーたち……。それぞれの記録はどこに行ってしまったのか。運動の魂は受け継がれていったのでしょうか。

市民アーカイブ多摩に集まった貴重な資料を整理している行間や資料の縁から想いや願いが伝わってくる時があります。誰がどんな想いで、誰に残すのか、わたしたちの仕事はそれに応える仕事です。

市民活動資料所蔵機関

平川千宏（元住民図書館）

私は「市民活動資料」——保存

と公開の全国的状況」を執筆しました。

まず定義です。「市民活動」は、「市民たちが自発的に、他者や社会のために、営利を目的とせずに行う活動のこと」です。次に「市民活動資料」については次のように規定したいと思います。

・市民活動のなかで生み出された資料

・市民活動のなかで集められた資料

・市民活動に役立つ資料

次に「資料」の範囲ですが、紙資料のほかに、音声資料、映像資料、マイクログラフ資料、電子資料、博物館（モノ）資料など、広範囲にわたります。

以上の定義や範囲に基づいて、現在把握しえた限りで、228の資料の所蔵機関・団体の一覧を付しました。

全体の傾向として、主題の分野別では、「戦争・平和」「環境・公害」「人権」等に関する資料を所蔵しているところが多い。資料を所蔵している機関・団体を、「大学」「国公立機関」「民間」に分け、さらにその中を細かく分けて見ると、実に多様な機関・団体で所蔵していると、いうことが分かります。

複数の資料群を多量に持つ

ているところとしては、立教や法政のように大学が目につきます。その他公立の機関では図書館が多く、民間では市民活動団体自身が持っていることが多いです。

社会教育運動として

荒井容子（法政大学）

私は学生時代に東村山市の公民館づくり運動を調査する過程で、故・奥田泰弘先生（中央大学）に誘われて、市民活動サービスクーナー利用者交流会の活動に81年春頃から関わりました。綺麗にファイルされた市民の運動資料（通信やチラシ等々）の前に立ち、多摩地域の市民の運動、活動に思いをはせ、交流会会員の活動を通して、コーナーが、集会等、多様な形で市民団体を支えていることも目の当たりにしました。

そんな経験もあり、私は「市民活動資料情報センター」をつくる会「発足時から、目指すべき「資料センター」の「社会教育」的役割にこだわってきました。そして今なお、運営しながら継続して深めていかなければならない課題であると思っています。今回の『大原雑誌』の特集企画はそのための一つの契機として位置づけまし

た。私自身は今回のこの特集の中で、「市民活動」資料の収集・提供の「目的」の中に位置づけられる「社会教育」と呼称した意義——市民活動の学習支援——と、また、「市民活動」資料の収集・提供という活動自体のもつ「社会教育」的意味——市民活動の思想を飛躍させること——を、社会教育実践史の中に位置づけて論じました。

◆第2部 コメント



町村敬志さん、石居人也さん

アーカイブとして

必要な覚悟

石居人也（一橋大学）

今回の『大原社会問題研究所雑誌』を読んで、いくつか考えたことを披露することで、コメントしたいと思います。

市民団体・個人からの継続的な資料収集には、多くの困難がともなっていたでしょう。

それは、生活に関わる問題ととり組む主体たる市民が、「残

す」意識をもちにくいたためです。それゆえ、発行元にさえないものがここに残った（山家）ことは、大きな意味をもっています。ただ、従来の方法は「マンパワー頼みのところがあり、継続性・安定性には課題が残るそうです。

また、各市民団体との活動協力、換言すれば市民協働は、サーヴィスの提供者と享受者とを固定化せず、双方が教え／学ぶことにもつながってきました。これは、生涯学習や社会教育をめぐる議論とも関わって、すぐれて今日的なあり方といえるでしょう。

ところで、資料の収集・保管・公開の主体は、「公」「民」いずれも「厳しい」（中村）現状にあります。それゆえ、「誰が残すかが大事」ではなく、「誰が残すかが大事」なのかも知れませんが、一方で、こうした時だからこそ「誰が残すか」も大事ではないでしょうか。このことは、資料の保存先の確保自体が市民運動だった（江頭）ことも通じるでしょう。そのうえで、ここでは、可能であれば主体は「民」がよい（平川）との見解が示されました。「公」に備わっている「信用」や「不偏」「普遍」幻想は見のがせませ

んが、きめ細かな対応によって、「民」＝NPOの強みが活かすことに期待しています。

アーカイブズの重要な役割のひとつは、「いま」の検証可能性を同時代および後世に対して担保することで、それが資料の「旬」「賞味期限」(杉山)という言葉で表現されました。それに加えるならば、資料にはモノとしての限界「消費期限」も避けがたく存在します。それを補うのが、聞きとりやデジタル化であり、担い手の記憶にしか残らないものを、インタビュアーなどで再構成する(安東)ことには課題もあります。必要さが認められます。

さいごに、検証可能性の担保は、場合によっては市民活動にとってネガティブな像の提示につながる可能性もあることには留意が必要です。別の文脈で「両刃の剣」(荒井)という表現が用いられています。検証可能性の担保は、運動にとってそれにあたるでしょう。寄託・寄贈する者にも、公開する者にも、そして活用する者にも、「覚悟」が求められます。そのことを念頭に、資料の保管と活用にあたるのが大切だと考えます。

市民活動のバトンを

つなぐために

町村敬志(二橋大学)

この間、私も市民アーカイブ多摩の設立の過程に関わらせていただきましたが、本日は今回こうした機会をもつなかで改めて感じた、このアーカイブズをつくる活動・運動自体の意義と課題について、コメントさせていただければと思います。

72年に開設された「市民活動サービスクーナー」に集まったミニコミ等は、歴史的な視点から見れば、70年代から90年代にかけて人口の急増した郊外地域で発生した諸課題、そしてそれらに各地で取り組んだ市民活動や住民運動の多様な足跡を示すものであったと位置づけることができるでしょう。

しかし、こうした貴重な資料群は90年代末からの都政の転換とともに存続の危機に直面します。こうした動きに対抗し独自の拠点を求めNPOとして新たな活動を開始したのがアンティ多摩でした。また、これと連携しつつ新たな展開を模索したのが「センターをつくる会」の活動であったといえるでしょうか。これら2つの活

動は、新自由主義がもたらした自治の後退に抗する2000年代(最初の10年)の市民活動そして運動としての性格をもっていました。

以上のように振り返ると、14年、新しく生まれた市民アーカイブ多摩という活動のもつ歴史的意味は、次のように要約することができそうです。すなわち、70～90年代の市民活動・住民運動から渡されたミニコミというバトンを新自由主義の荒波から守ろうとした00年代の市民活動・社会運動があり、こうした成果全体の上に

立つて、市民活動資料という形で新しいバトンを10年代以降の市民活動へとつないでいくのが市民アーカイブ多摩の活動であると。インターネットの爆発的な普及により市民メディアの形が多様化し、「アーカイブ」の形成自体が市民活動の課題として浮上してくるなか、この新しい活動はそれ自体、新しい時代の市民活動の一形態となる可能性をもつ、とも言えるかもしれません。

このように時代をつなぐ歴史的な役割がそこにはあります。しかし、以上のことはまた次のような事態と無縁ではありません。すなわち、市民活動

資料を守り伝え活用する営みとは、必然的に、異なるスタイルや理想をもっていた各時代の活動・運動とその担い手が出会う場となり、それゆえ、違いを踏まえた上での持続的な対話の試みが欠かせないと。これは言うほど簡単なことではありません。「資料」というものにこだわることで、こうした課題をどう乗り越えていくか。多くの宿題が待っているのです。

◆質疑応答

——設立運動のときなぜ自前のセンター開設と資料の移管先探しに分けたのか。

江頭 当初は移管先を探したが、受け入れ先が見つからず、大学や公共施設の状況も厳しく八方ふさがりだった。希望を持って運動をすすめるためにも建設計画を考えることが必要だった。

——どのようにして小平市史編纂に市民アーカイブ多摩の資料が活用されたのか。

杉山 熱心な研究員がいて問合せがあった。自分も市史に関わっていて知り合いだったこともある。ミニコミが歴史の証言者になってきている。

——これから団塊世代の遺産としての資料が大量に出されてくる。

石居 町田市立自由民権資料館で、家永三郎資料について打診されたことがある。全てを受け入れ

ることはできなかったが、研究資料の一部を引き受けた。資料の重複チェックの際、奥付を確認するだけでは危い。書き込みなどがあれば資料の意味が違ってくる。

——市民活動サービスクーナー自身のアーカイブもあるのか。

杉山 まだ未整理。ボランティアの長島さんと自分で少しダンボールを開いた程度。今後の課題。クーナーは70年代に市民運動を支援することを意識していたが、我々はそこから遠ざかっているようだ。

——原発反対運動の映画をつくったがアーカイブの意味の重さを痛感した。時間との闘いだ。その中で歴史教育の限界を痛感した。

石居 歴史教育で近・現代史が薄いのでは体験的にも実感している。市民アーカイブ多摩の資料を運動資料として使いたい、まだるっこしさを感じる。

——同感。沖縄密約裁判の時も米国の図書館は、現物・テキスト・解説の形で情報開示している。日本はひたすら隠すので、そのしくみを変えなければならぬ。変える提言などもしてほしい。

町村 我々も感じているが、まずは資料を「残す」ことに軸足を置いて

いる。いろんな人の知恵が必要。本当に必要なものはどんどん隠されている。それを跳ね返すことも、運動であるからには必要だと思っ

中村 アーカイブズ学の中で「市民活動」が出てくるのは戦後。長く対象として考えてこなかったこともある。

ミニコミ紹介

市民アーカイブ多摩で所蔵する団体や個人が発行する会報・通信（ミニコミ）を発行者の方に紹介していただきます。

あさやけだより

「みんなの力で障害者の働く場をつくっていこう」と1974年に地域のアパートを借りて、5名の障害者と「障害者の権利を守り生活の向上をめざす会」のメンバーであさやけ作業所を設立しました。設立から43年になりますが、現在では小平市内に障害がある人たちが仕事をする作業所が5か所、地域の住まいの場としてのグループホームが5か所、障害を持つ人たちの相談機関としての地域活動支援センター1か所を運営しています。

会報『あさやけだより』は、ガリ版刷りのものが10号ありますが、76年10月に活字版の第1

- ・創刊 1976 年、2500 部発行
- ・体裁：B5 判・8 頁・モノクロ
- ・問合せ：asayake.kaze@asayake.or.jp
- ・市民アーカイブ多摩所蔵：1-377,391,393-412,414-424 号



号を発行し、そこから数えてこの40年間で424号になりました。こんなに長く発行し続けたことには理由があります。あさやけ作業所を設立した頃は、東京ではじめての共同作業所という時代の制約もあり、年間運転資金の15%ほどしか公的助成金が受けられませんでした。あとは総て廃品回収、バザー、わかめの販売、募金といった地域住民の理解と協力なしにはできない収入によって、運営が維持されていたのです。毎月一回の廃品回収に協力してくださる地域の方への、せめてものお礼として、作業所の様子を伝える『あさやけだより』を発行して手渡しているのです。現在も廃品回収を行っていますので、廃品回収の日までに必ず発行しなければならぬことが継続する力なのです。発行部数は2500部で、廃品回収で2000部弱配布し、残りを各事業所の家族やあさやけの支援者等に配布しています。

誌面は、地域の多様な方に配布しているので、あさやけの活動や様子をわかりやすく伝えていくことを第一に考えてい

チマ友にゆうず

チマ・チヨゴリ友の会は、朝鮮学校に通う子どもたちの支援、共助の市民グループです。朝鮮学校は、日本で生まれた在日韓国・朝鮮人の子どもたちが、自らの言葉、文化、歴史を学ぶ場であり、同胞社会を傳承してゆくコミュニティでもあります。会の結成（1998年）のきっかけは、子どもたちが心無い日本人から迫害されたことでした。迫害があるから始めた会ですから、仲良くな

ます。その他、障害をもつ仲間たちが生き生きと働いている姿や今の障害者福祉のことをわかりやすく地域に伝えたいと思っています。

この『あさやけだより』を記録として残すために、設立30周年のときに100号ごとに合本しています。それを見ると『あさやけ』の歩んできた歴史が一目でわかります。特に最初のころはみんなの熱気や期待が誌面に溢れ、活動に活気があったことが伝わってきます。それに負けないようこれからも500号、600号をめざします。（中川幸夫）

▽424号内容Ⅱ新年あいつ、仲間紹介、重度障害者グループホーム「歩」から共同ホーム「歩」、運動の継続を求めて事業所の抱負、成人おめでとう他

れば用済みになるはずでしたが、もう16年も続けてしまいました。無念にも、迫害は心無い個人から、ヘイトスピーチの集団に、高校無償化から排除する政権に、補助金排除の自治体に、排外主義を煽るマスコミにと、今や日本社会全体を覆っています。

しかし、私たちは気付きました。隣国への悪意の矢がいつの間にか、秘密保護法、集団的自衛権、沖縄の基地拡大、9条改憲の毒矢となって自らに向かってきたことに。もはや朝鮮学校支援は、日本社会の課題との自覚が広がっています。

『チマ友にゆうず』は、その一助と思っています。『にゆうず』のはじまりは、立川の朝鮮学校関係者と日本人有志、合わせて60人ほどの情報、意見交換、交流のためで60通でした。今では500通に増え、年平均6回の発行で1002号を数えました。現在は、東京朝鮮高校生による無償化裁判の日程に合わせ発行しています。次の裁判は3月18日です。編集は手書きやパソコンなど自由です。カットはメンバーが描き、書き



- ・創刊 1998 年、500 部発行
- ・体裁：B5 判・12～16 頁・モノクロ
- ・問合せ：tel・fax:03-3321-6677
- ・市民アーカイブ多摩所蔵：62-102 号

手も固定化しないよう工夫してきました。印刷は公民館や他団体（府中緊急派遣村）の軽印刷機を借りたりしています。『にゆうず』発行の他、ハングル講座やキムチ頒布会、無償化裁判支援など、ますます活動が広がっていて、心配なのはスタンプ不足です。

それでも『にゆうず』代金は一部50円、少人数だから大変そうなどとは感じさせない工夫を心がけています。例えば、印刷、折り、封入れ、宛名ラベル貼りなど、雑務に関わる面々が、それぞれ一言書くことになっている編集後記、それに活動予定が一目瞭然のスケジュールチェック欄などです。一度でいいから読者になってください。なにしろ、会則には「入会自由、脱会もつと自由」とあるのですから。（松野哲一）

▽101号内容Ⅱ東京朝鮮高校生「無償化」第2回公判報告、「東京朝鮮高校生裁判」って？三多摩のつどいに参加して、「在日一世と家族の肖像写真展」2015年夏の現況、統一マダン・キムチ屋報告、生活・労働相談、編集後記ほか

「紙の碑」がつなぐもの

増沢 航

歴史や主張などを紙に印刷し、冊子にした「紙の碑」もたくさん

八王子には、かつて「ふだん記」という文章記録運動を起した橋本義夫という人物がいた。大学時代、この運動に興味をもった彼は、彼の生き方にも興味をもち、ふだん記の活動が始まる前に起こした「建碑運動」についても調べようになった。

多様なミニコミの出会い

そんなときに出会ったのが「ミニコミ広場」だった。たまたま手にしたパンフレットには市民が発信する資料がたくさん保管されていると書いてある。いかにも手作り感あふれる案内板

が掲げられた古いアパートの1階、手狭な一室に入ると、そこにはぎっしりと資料が置かれていた。どこかで見たような資料もあれば、いままで目にしたことのない資料もある。とにかくその種類の多様さに驚いたのを覚えている。その一つ一つに目を通していくうちに、ぼくは資料整理のようなことにも関わるようになった。

試行的に開室していた「ミニコミ広場」は資料センターをつくる会の運動を経て「市民アーカイブ多摩」と名称を変え、以前と比べれば内装も外観も格段によくくなった環境で資料に触れることができるようになった。

先達の「紙の碑」に会える

この膨大な資料群を目にすれば「ミニコミ」とひとくくりにできない資料の内容の幅に驚くのではないかと思う。分野もさまざまなあれば、形態もさまざまな資料があるということは、つまり何か一つの分野に興味をもったとき、ここに来ればそれに関わる分野の先達が作り上げた「紙の碑」と言うべきものが必ず用意されているということでもある。それは同じ問題を抱えた人、何かの問題を調べようと思っている人にとって答えには

市民アーカイブ多摩の資料棚から①

市民アーカイブ多摩では、ミニコミを約50の分野に分けて書架に並べています。まず大きく10にわかれた分野は、00市民活動総記、10政治・経済・産業、20平和・戦争、30人権・差別、40環境、50公害、60社会福祉、70教育・文化、80生活・消費者、90その他です。それぞれの分野を更に細かい分野に分け、分類番号順に配架しています。この欄では、分野ごとの資料の内容や特徴を紹介していきます。

今回紹介するのは分類番号06「市民団体・NPO」。ここには、一つの地

域でさまざまな活動している団体や、市民団体支援を行っている組織のミニコミが集まっています。その中でも今回は「市民活動・NPO支援センター」発行のミニコミを紹介しします。現在66誌(紙)。

運営主体・対象による特徴

支援センターは、大きく分けてサービス対象が全国、都道府県、市町村に分けられる。その中でも公営、民営、または公設民営など設置や運営主体によって、中身は変わってくるようだ。

内容としては、①特集記事(啓蒙・提言)。②地域団体情報(集会報告も)。③今後

地域と活動をつなぐ

◇市民活動・NPO支援センターのミニコミ(分類番号06「市民団体・NPO」から)



の催し情報。④運営団体の活動紹介・報告。⑤その他(書評、ひと紹介、クイズ、スタッフ挨拶)などがおもな掲載内容。

全国レベルや民営組織が発行している広報紙は①④が多く、公営・公設民営や市町村を対象とした団体は②③が多い。①の特集記事や②の地域団体情報を取り上げ方により、発行している団体の視点や姿勢が見えてくる。

政治から産業まで多様な記事

具体的に中身を少し紹介していく。『ぐらすレター』(ぐらす・かわさき発行)79号では、「川崎市予算学習会の報告」「神奈川県公立高校不合格者発生問題」など、政治問題にしっかり向き合っ

キャッチフレーズで目的を表現

通信名にキャッチフレーズ

を添え、一言でその団体や広報誌の目的を表しているミニコミも多い。『宝塚NPOセンター』は、「市民の手で市民活動を支える」、日本NPOセンター『NPOのひろば』は「NPOそれはわたしたちの未来―新しい社会の構築と企業・行政とのパートナーシップの確立をめざす」

して、「三鷹市市民協働センター『ニュースレター』は、「市民活動を応援し、民学産公の協働によるまちづくりを推進する」、まちづくり情報センターかながわ『たあとる通信』は、「市民と地域社会の自立をめざす」、淡海（滋賀県）ネットワークセンター『おみネット』は「人と企業とNPOをつなぐ」とある。

〇をつなぐ」とある。 誌名にも「想い」を込めて

そして直接通信名に想いを込めたミニコミ。横須賀市立市民活動サポートセンター『のたろん』は、「Not alone」(ひとりじゃないよ)。ふじさわNPO連絡会は『円卓』(Round Table)、調布市市民活動支援センター

『えんがわだより』(まちの「えんがわ」になりたい)、狛江市地域協働課『わっこ』(わい和・輪・環、こいコミュニケーション、狛江)、ぐんまNPO・ボランティア通信『Brigade』(スペイン語で「そよ風」)、広島市まちづくり市民交流プラザ『らしつく』(自分らしく、粋なくらし)などなど。

キャッチフレーズにしても誌名にしても、同じ支援センターとはいえ、目指すところは少しずつ違うのがわかる。支援センターの内容はもちろん、分野を限らずまちの様子を知りたい時、概観を把握するには近道になる分類06。あなたの目線でチェック！(江頭晃子)

記憶と記録の場をめぐる旅③

法政大学 大原社会問題研究所 環境アーカイブズ 研究機能をあわせもつ

京王線めじろ台駅(または横浜線相原駅)からバスで10分、森の中に囲まれた法政大学の広大な多摩キャンパスの中に「環境アーカイブズ」はある。



バスを降り坂を登っていくと、正面の建物(総合棟)の5階の角部屋にひっそりとした佇まい。中に入ると、書架がほとんど無いことに驚く。利用者席にはパソコンが置かれ、カウンター奥にもスキナー、映像機器などが並ぶ。

◇保存方法を重視

これは、資料のほとんどが閉

架式で、

利用者が閲覧希望を出したものを職員が地下2階の書庫まで取りに行くことに

よる。利用者にとつては、直接資料を見られないが、「保存」に重きを置いているが故である。資料収集した後、データベ

ス化しながら資料価値の評価を行い、公開方法を検討(私信などは非公開)。パソコンを使って文書類はスキナーし、映像も電子化していく。現物の紙資料は中性紙保存箱に入れ、毎日の温湿度管

◇環境から市民活動全般まで

09年に文部科学省からの大型助成金を得てでき、まだ歴史の浅い資料室だが、熱心な収集活動により、既に地下の保存庫が一杯になっている。

現在の資料を大きく分けると3種。①環境関係(棄害スモン、水俣病熊本放送映像、サリドマイド事件、自然の権利、徳山ダム建設反対、野生生物保存他)。②市民活動ミニコミ・資料(市民活動サービスコーナー資料群、当会寄託資料)。③原発関係資料(たんばろ舎の原発関係映像、原子力資料情報室の全国各地の原発関係団体の通信等、3・11関係で新規に収集した集資料)である。

①は、例えばスモンの会全国連絡協議会などの運動主体側の、日誌・会報・ビラ・パンフレット・ポスター、各種集会や会議の記録、集会用垂れ幕・横断幕や、全

国各地の棄害スモン判決の裁判資料、運動史の原稿などダンボール58箱分。

当会が寄託した②は、主に70年代から02年までのミニコミや図書・資料など500箱。02年以降の号を、市民アーカイブ多摩で保存しているタイトルもあり、両資料室を見ることが、連続するものもある。

③の中には、3・11から同年9月11日までの政府機関や地方自治体が発した文書や記者会見などの映像を日々記載内容が変わるHPからハードディスクにデータを保存したものもある。

◇資料の活用・研究を促す

環境アーカイブズのもう一つの特徴は、「資料を活用する」視点を持ったRA(リサーチ・アシスタント)の存在である。非常勤勤務ではあるが、近代史、教育人類学、社会学、アーカイブズ学などを専門とする若手研究者が6

人いる。分野ごとの資料整理を担当して整理方法も模索しながら、資料の一つのテーマで集積させたり、加工する。レファレンスの一貫として学生に卒論のアドバイスをすることもある。

◇展示にも挑戦

今後の課題は、資料をより活用してもらえよう利用を増やしていくこと、保存環境の更なる整備とのこと。また、物や紙、ハードディスクなど多様な媒体があり、どうすれば一番長く保存できるのかということも模索している。今春には初めての展示にも挑戦し、直接現物を見ることで資料の息づかいを感じてほしい、と企画中だ。(E)

法政大学大原社会問題研究所 環境アーカイブズ

- ・開館日:月~金(公休日、大学休校日除く)
- ・開館時間:9:00-11:30,12:30-16:30
- ・住所:東京都町田市相原町4342 法政大学総合棟5F
- ・tel:042-783-2098 ・入館料:無料
- ・e-mail:k-archives@ml.hosei.ac.jp

アーカイブ多摩図書館

◆ミニコミ送ります

どのように当資料館のことを知られたのか、「市民アーカイブ多摩」宛にミニコミを寄贈してくださる団体が少しずつ増えている。ご自身が購読しているミニコミの寄贈申し出も。人伝えとミニコミ伝え、信頼関係を少しずつ広げること、資料を充実させていきたい。

◆真冬の資料館

1週間ぶりに資料館を開けると、部屋に入るとひんやり。開館中は石油ストーブ2台と電気ストーブがフル回転。窓から見えるグリーンサンクチュアリ悠の庭園と保護樹林の木々は葉が落ち、寂しさも感じるが、心落ち着く風景でもある。来館者も夏より多く、資料を読みこむにはぴったりの季節。

◆図書館情報学を学ぶ学生

1月某日、東京学芸大学の図書館情報学を学ぶ学生さんが先生と一緒に来館。来館後にいただいたメールを紹介。「制度化された公立図書館の見学は、学生もこれまで経験があるのですが、こうした市民的発想と共同による資料室を見ることは初めてのことでした。まずカフェの趣のある建物とインテリアに学生たちは好感を抱いたようです。そして、書架に整理されている市民がつくった多彩で膨大な資料・情報群に驚いたようです」とのこと。ミニコミの魅力にもっとも引き寄せたい。

◆参加者66人

1月のシンポジウムには西日本に住む会員の参加もあった。支え・関心をもってくださる方と直接顔を合わせ、言葉を交わすことで、日々の地道な活動を励まされる思いがし、元気が出た。

ご意見・感想

- ・住民にとつての「活動」に根差した形からの、学問的な整理提言も必要だし、大切なことかと思えます。今後の活動を楽しみにしています。
- ・①資料のデジタル化は今後必要になるのでは？ いつでもだれでも、どこからでも資料にアクセスできるようにすることが理想です。②視聴覚資料の重要性(ドキュメンタリーフィルムなど)、③資料受け入れの選択。市民活動資料をすべて受け入れるのではないと考えるが、資料の選択基準はどのようなものなのでしょうか。
- ・幅広い活動の資料を、保存と活用という面で切り分けていくことは大変な作業です。
- ・利用のためのガイドランスを改善して欲しい。
- ・資料の活用が重要な課題。
- ・古い資料を残す(どの程度、どのくらい、利用度など)ための方針をたてるのは難しいと思いました。
- ・ミニコミがきちんと保存されていて見がいがありました。

拡大運営委員会

- 10月17日 第7回運営委員会。参加者6人。(検討事項…『大原雑誌』発表会日程、内容。『アーカイブ通信』2号、HP更新、利用マニュアル、運営委員会会場)。
- 11月21日 第8回運営委員会。参加者2人。(アーカイブズ学会報告、『アーカイブ通信』3号企画、利用者対応マニュアルとスタッフの心構え等の文書作成)。
- 12月19日 第9回運営委員会。参加者5人。(検討事項…1月11日シンポジウム当日分担、助成金申請、法人化計画、定期総会日程、開館1周年記念事業、利用者対応マニュアル)。
- 1月11日 シンポジウム「市民発の情報」が社会を変える開催。
- 1月16日 第10回運営委員会。参加者6人。(検討事項…定期総会、シンポジウム反省、連続トーク企画、新パンフレット作成、当番講習会開催他) ※第3金曜日に開催

カンパありがとう

井出孫六、鈴木美和子、増沢航、前みつ、匿名1人(410-151 敬称略)

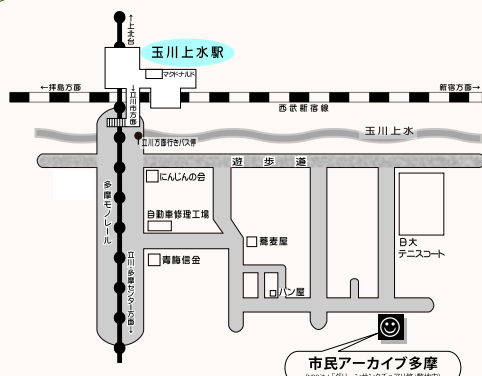
会員数(2015.2)

・108人

(正会員51人、賛助会員57人)

編集後記

市民アーカイブ多摩の開館から1年、「アーカイブ通信」も3号を発行できました。けれどもどちらもまだまだ試行錯誤中です。今後も新たなイベントやコーナーを企画しますので、みなさんからの意見をお寄せくださると嬉しいのです。次号は6月発行予定。(江・湯・増)



- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(お盆休み・年末年始の休館あり)
- ・開館時間：13時～16時 ・入館料：100円(会員無料)
- ・所在地：東京都立川市幸町5-9-6-7
(多摩モノレール、西武線「玉川上水駅」南側徒歩8分)
- ・電話&fax：042-536-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：2002年以降の市民活動団体や個人が発行しているミニコミ(通信や会報など)1200タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。<http://homepage3.nifty.com/simin-siryo/>